

西俊輔の「毎日楽しく」

Vo1.78 2012年2月号

最近、東京大学が発表した、5年後をめどに4月の入学時期を9月に変更するというニュースが話題になりました。北海道大学などが賛同する意向を示しているようで、主要大学が追随すれば、こうした動きは今後進んでいくかもしれません。ただ、この事実だけを見るとなぜわざわざそんなことを、とってしまいますが、興味深いのはその理由です。

グローバルな世の中になった現在、世界各国の留学生は世界中の大学を歩き来すようになりましたが、世界の大学は9月入学が多数派だそうで、4月入学制度をとっている国は日本をはじめごく少数派だそうです。

問題は、4月から9月の5か月間のブランクがネックとなって、世界の優秀な学生が日本の大学には集まりづらくなっているということです。9月入学制度の国の学生にとっては、年度の変わり目や卒業した後、日本の大学に留学するためには次の4月まで待たなければならないため、普通はすぐに入れる9月入学の学校を選んでしまうためです。

その結果、イギリスの教育専門誌が発表した最近の世界の大学ランキングによると、日本の大学では東大の30位が最高で、200位以内に入った日本の大学はたった5校しかなかったそうです。何でも欧米に合わせればいいというわけではもちろんありませんが、実際、こうした理由で日本の競争力が落ちていくとすれば、何らかの対策はとらざるをえません。今回、東大が発表した9月入学への変更の重要な理由が、世界の優秀な学生が集まりやすいようにして、日本の競争力を今後も高めていく、というところにあったようです。

9月入学が定着するためには、学生を採用する企業の側でも新卒採用の時期をずらす必要があり、学生だけの問題にはとどまりません。大手企業が9月採用になれば、他の企業もこれに合わせざるをえませんから、中小企業にとっても無関係ではありません。

一見すると直接は関係しないと思われるグローバル化の波が、意外なところで私たちの身近な問題になる可能性があることをこの例は教えてくれています。

